

看護ケアの連続性と質

～コロナ禍であらためて安全、安心の患者、家族に寄り添う看護を考える

助言者 益 加代子 (大阪府立大学看護学研究科)
運営委員 赤城 いちよ (国立研究開発法人国立精神・神経医療研究センター)
小笠原 めぐみ (慶応病院労組)
高橋 多鶴子 (全日赤医療センター第一労働組合)
山崎 博子 (全日赤医療センター第一労働組合)

新型コロナウイルス感染症の感染拡大以前から、わが国の100床あたりの医師数、看護師数はOED諸国のなかで低水準です。また社会保障財源の対GDP比の国際比もイギリス、フランス、スウェーデンから見ると低水準となっていました。

新型コロナウイルス感染症の感染拡大は、我が国の医療提供体制に多大な影響を及ぼし、いのちをまもるうえでいかに医療従事者の増員が必要か、今までの医療提供体制が間違っていたかが明らかになりました。

局所的な病床・人材不足の発生、感染症対応も含めた医療機関の役割分担・連携体制の構築、マスク等の感染防護具や人工呼吸器などの医療用物資の確保・備蓄など、地域医療の様々な課題が浮き彫りになりました。病院・地域の医療従事者は感染予防と自粛生活を徹底し、自身も感染するのではないかとという恐怖や不安・風評被害を耐えながら、患者・家族が安心して、安全に療養できるように、途切れのないケアを提供してきました。

一方で、一般患者の受診抑制が顕在化し、原疾患の重症化をもたらし、重症者用のベッドが埋まっていることによって、心筋梗塞や脳梗塞など緊急に必要な医療までも阻害されている状況が起きています。地域では、自粛生活が高齢者のフレイル状態を増強させ転倒事故が多発しています。また訪問者からの感染を恐れるあまりに、訪問看護サービス拒否することなども起きています。面会が出来なくなったことで、在宅療養を余儀なく選択するケースも増えています。

今回の分科会では、このような状況下の実践報告をとおして、改めて患者、家族が安全に安心して途切れのないケアを受けるためにはどうしたらよいか、教育現場、訪問看護師、急性期病院での感染病棟看護師、医療労働組合などの実践報告を通して多職種で考えてみたいと思います。みなさんの参加をおまちしています。

- 今回の医療研では、前回までの「看護ケアの質」と「医療施設と在宅をつなぐケア」の分科会が合併しました。また、看護系の他の分科会の内容も一部取り入れながら開催します。
- 今回の分科会では、初めてのWEB開催ということで、レポートの一般募集は行っていません。予め依頼させていただいた方のレポートを中心に討論を行います。